



対訳で楽しむ 『失われた時を求めて』

スワン家のほうへ 3

高遠弘美

山登りの愉しみは、じつは頂上制覇ではなく、ふと立ち止まって小川のせせらぎに耳を傾け、木立の合間から差す木漏れ日をうち眺め、道ばたに咲いている花々の香りをかぐといったことにあります。長編小説もそうで、とくにプルーストはどの頁を開いても味わいが深いのですが、それでも限られた紙数では、最初のほうであり立ち止まってばかりはいられません。誰もが知っている名勝に寄らないわけにはいかないでしょう。今回から二回、「プルースト効果」としても近年話題になっているマドレーヌの挿話をじっくり読んでみたいと思います。まずはマドレーヌの挿話の直前に置かれた一節から。

Je trouve très raisonnable la croyance celtique que¹⁾ les âmes de ceux que²⁾ nous avons perdus sont captives dans quelque être inférieur, dans une bête, un végétal, une chose inanimée, perdues³⁾ en effet pour nous jusqu'au jour, qui⁴⁾ pour beaucoup ne vient jamais, où⁵⁾ nous nous trouvons⁶⁾ passer près de l'arbre, entrer en possession de⁷⁾ l'objet qui est leur prison. Alors elles tressaillent, nous appellent, et sitôt que nous les avons reconnues, l'enchantement est brisé. Délivrées par nous, elles ont vaincu la mort et reviennent vivre avec nous.

Il en est ainsi de⁸⁾ notre passé.

訳 私はケルトの信仰をきわめて理にかなったものだと思っている。誰かに死なれたとしよう。そうすると、死者の魂は何か下位の存在、獣や植物や無生物のなかに囚われる。彼らは、たまたま私たちがそうした木のそばを通りかかったり、彼らがそのなかに囚われている事物を手に入れたりする日（たいていの人にはそうした日は来ない）までは、私たちにとって亡くなったままだ。しかし、そのときになると、魂は打ち震え、私た

ちを呼ぶ。私たちが彼らを認めるや否や、呪縛は解かれる。私たちによって解き放たれた彼らは死に打ち勝ち、この世界に立ち返って私たちとともに暮らすことになる。

私たちの過去もそれと同じである。

注 1)「信仰」の内容を説明する同格の que。2) 指示代名詞と関係代名詞。celui qui /que がいわば原形。直訳は「私たちが失った人びと」。翻訳では原文を何度も読んで、その心地よいリズムを日本語に移し替えるべく努めるので、必ずしも直訳の通りにはならない。3) 1行目の les âmes (f.pl.) を受ける。「死者の魂」と訳したので、5行目の leur や les、6行目 elles は、日本語の語感から「彼ら」とした。4) 先行詞は直前の名詞 jour、5) の先行詞も同様。6) < se trouver + inf. > 「たまたま～する」。7) entrer en possession de は熟語。TLFi (Le Trésor de la Langue Française Informatisé) では、devenir le possesseur, le propriétaire de と書かれている。acquérir と同義語。entrer は、少し前の passer と同格。8) Il en est ainsi de 「～についても同様だ」。

そしていよいよマドレーヌの挿話が始まります。ある冬の日のこと、帰宅して寒がっている主人公に母親が紅茶を飲んだらと勧めてくれます。名文中の名文です。長いですが、一気に参ります。最初の Elle は母親です。

Elle envoya chercher un de ces gâteaux courts et dodus⁹⁾ appelés Petites Madeleines qui semblent avoir été moulés dans la valve rainurée d'une coquille de Saint-Jacques. Et bientôt, machinalement, accablé par la morne journée et la perspective¹⁰⁾ d'un triste lendemain, je portai à mes lèvres une cuillerée du thé où j'avais laissé s'amollir un morceau de madeleine. Mais à l'instant même où¹¹⁾ la gorgée mêlée des miettes du gâteau toucha mon palais, je tressaillis, attentif à¹²⁾ ce qui se passait d'extraordinaire en moi. Un plaisir délicieux m'avait envahi, isolé, sans la notion de sa cause. Il m'avait aussitôt rendu¹³⁾ les vicissitudes de la vie indifférentes, ses désastres inoffensifs, sa brièveté illusoire, de la même façon qu'opère l'amour, en me remplissant d'une essence précieuse : ou plutôt cette essence n'était pas en moi, elle était moi. J'avais cessé de me sentir médiocre, contingent, mortel. D'où avait pu me venir cette puissante joie ? Je sentais qu'elle¹⁴⁾ était liée au goût du thé et du gâteau, mais qu'elle¹⁵⁾ le dépassait infiniment, ne devait pas être de même nature. D'où venait-elle ? Que signifiait-elle ? Où l'appréhender ? Je bois¹⁶⁾ une seconde gorgée où je ne trouve rien de plus que dans la première, une troisième qui m'apporte un peu moins que la seconde. Il est temps que je m'arrête, la vertu¹⁷⁾ du breuvage semble diminuer.

訳 母は溝の入った帆立貝の貝殻で型をとったように見える、「プチット・マドレー

ヌ」と呼ばれる、小ぶりのぼってりしたお菓子をひとつ持ってこさせた。やがて私は、陰鬱だった一日の出来事と明日も悲しい思いをするだろうという見通しに打ちひしがれて、何の気なしに、マドレーヌのひと切れを柔らかくするために浸しておいた紅茶を一杯スプーンにすくって口に運んだ。とまさに、お菓子のかげらのまじったひと口の紅茶が口蓋に触れた瞬間、私のなかで尋常でないことが起こっていることに気がつき、私は思わず身震いをした。ほかのものから隔絶した、えもいわれぬ快感が、原因のわからぬままに私のうちに行きわたったのである。人生の苦難などどうでもよくなり、災難などは無害なものにすぎず、人生の短さなど錯覚だと思われた。それは恋愛の作用と同じで、私を貴重な何かの本質で満たしたのだ。あるいはむしろ、その本質は私のなかにあるのではなくて、私自身だったと言うべきだろうか。私はもはや自分が平凡な、偶然に存在するだけの、死すべき存在だとは感じていなかった。この力強い喜びはどこから来たのか？ それは紅茶とお菓子の味に関係があるものの、それをはるかに超えたもので、同じ性質のものではあり得ないと私は感じた。それはどこから来たのか？

何を意味しているのか？ それをどこでとらえたらいいのか？ 私は二口目を飲む。だが、そこにはひと口目のとき以上のものは何もない。三口目でもたらずものは二口目より少ない。いったんやめるべきだ。紅茶の効き目はあきらかに衰えている。

注 9) *TLFi* によれば、*odou* : Arrondi, épais, rebondi ou présentant une certaine consistance. 「ぼってり」と訳したゆえん。10) 直前の *la morne journée* と同格。11) à l'instant même où 「まさに…の瞬間に」。12) *attentif* à : Qui veille avec attention (*GR* : *le Grand Robert*)。13) *rendre* … 「～を…にする」。les vicissitudes, ses désastres, sa brièveté が同格で並ぶ。14) elle は cette puissante joie。15) も同じ。16) ここから動詞は直説法現在に変わる。動作がありありと目に浮かぶ「物語体現在」。17) 「効力、効き目」

主人公は何とかしてそこに秘められたものの正体を探ろうとします。

Puis une deuxième fois, je fais le vide devant lui, je remets en face de lui la saveur encore récente de cette première gorgée et je sens tressaillir en moi quelque chose qui se déplace, voudrait s'élever, quelque chose qu'on aurait désancré¹⁸⁾, à une grande profondeur; je ne sais ce que c'est, mais cela monte lentement; j'éprouve la résistance¹⁹⁾ et j'entends la rumeur des distances traversées. (….) Maintenant je ne sens plus rien, il²⁰⁾ est arrêté, redescendu peut-être; qui sait s'il remontera jamais de sa nuit? Dix fois il me faut recommencer, me pencher vers lui²¹⁾. Et chaque fois la lâcheté qui nous détourne de toute tâche difficile, de toute œuvre importante, m'a conseillé de laisser cela, de boire mon thé en pensant simplement à mes ennuis d'aujourd'hui, à mes désirs de demain qui se

laissent remâcher²²⁾ sans peine.

訳 私は精神 (lui = mon esprit) の行く手を空白状態にして、そのすぐ前に、まだそう遠くへは行っていない最初のひと口の味をもう一度置いてみる。何かが私のうちで打ち震え、場所を変え、上にあがってこうとしているのを感じる。深い海の底から碇を上げるように持ち上げなくてはならない何か。何かはわからないが、それはゆっくり上がってくる。私は手応えを感じ、はるかな距離を越えてくるその響きを耳にする。(略) いまはもう何も感じられない。止まってしまった。ふたたび沈んでいったのかもしれない。その夜の闇からいつかまた上がってくるか、誰が知ろう？ 十回も私はやり直して、その思い出のほうに身をかがめねばならない。そのたびに、困難な任務や大切な仕事となればどんなものからも気を逸らさせる精神のゆるみが私に勧めた、そんなことはやめにして、気軽に反駁できる今日一日の気がかりや明日の欲望のことだけをただ考えて目の前の紅茶でも飲んでいたほうがいいと。

注 18) *désancrer* : lever l'ancre (*GR*)。直訳すると「深いところから碇で引き上げられるような何か」。19) 「物の抵抗」を意味する。それで「手応え」とした。20) 省いた箇所にある *ce souvenir* を受ける。21) も同様。22) 「反駁する」。なお、この引用部分は基本的に「物語体現在」が使われている。読者は語り手と一体になった時間を「いま」生きているような感じすら味わうだろう。

耳で聞くプルースト

『失われた時を求めて』が BD (bandes dessinées) で始めたときも驚きましたが、1990年代の初めだったでしょうか、André Dussolier 吹き込みによる「スワンの恋」の朗読テープが出たときはさらに吃驚したことを覚えています。芝居を愛するフランス人はフランス語のことを、しばしば *la langue de Molière* と言います。18世紀最大の文人に敬意を表して、*la langue de Voltaire* とも言うのでしょうか。ただ、*la langue de Proust* とは言わないような気がします。しかし、プルーストのフランス語は意外に(?) 朗読に向いていて、私などもまだ学部学生の頃からプルーストの響きに魅せられて、何度も自分で朗読していました。その当時、あるフランス人の先生がマドレーヌの挿話などを朗読して下さったことがあって、プルーストの響きと文章のリズムに深い感動を覚えました。今では全巻の朗読 CD (全111枚) もありますが、まずは気負わずに「スワン家の方へ」の CD あたりからお聞きになっては如何でしょうか。

※原文は Du côté de chez Swann, *À la recherche du temps perdu*, Pléiade 版から引用。

※訳文は拙訳『失われた時を求めて 第一篇 スワン家の方へ I』(光文社古典新訳文庫)を使用。
(たかとお・ひろみ)